

# 「蛇の王国」カラクムル

## ー古典期マヤ社会のパワー・ポリティクスー

佐藤 孝裕

### 1. はじめに

カラクムルCalakmulは、メキシコのユカタン半島のカンペチェ州の東端、グアテマラとの国境から約35kmのところにある大遺跡である。発見されたのは1931年と比較的遅かったのだが、規模が壮大であることと、建立されたモニュメントの数が約120と他のマヤ遺跡と比べて傑出していることから（Carrasco 1998 : 380）注目されていた。しかし、生い茂る広大な熱帯雨林に阻まれ、本格的な学術調査が始まるのは1980年代に入ってからであった。先ず、カンペチェ自治大学のウィリアム・フォーランWilliam Folanが、1982年から始めた調査でセトルメント・パタンの最初の分析と地図の作成を行った。続いて、1993年にはラモン・カラスコRamón Carrascoの指揮のもとで国立人類学歴史学研究所によるカラクムル生物圏の考古学プロジェクトが開始され、土器や建築の分析や建物の復元などの作業が行われている（Carrasco et al. 1999 : 48）。

1980年代というのは、カラクムルの研究史にとってもう一つの意味で重要な転機になった時期でもある。それは古典期前期末のティカルTikalの衰退の原因とかがわりがある。マヤの遺跡の中でも最大規模を誇るティカルは、古典期最大の国家として以前から重要視されていた。古典期はティカルを中心にした時代だったと考えられていたといっても過言ではない。そのティカルで、6世紀の終わり頃から石碑が建立されなくなり、この事態は130年間も続くのである。明らかに国力が衰えたこの「暗黒時代」<sup>①</sup>の原因として当初考えられたのが、メキシコ中央高原に君臨し、メソアメリカ全体に大きな影響を及ぼしたと考えられた巨大都市国家テオティワカンTeotihuacanの衰退である。ティカルの勃興をテオティワカンの後援によるものと考えた研究者は、後楯を失ったためにティカルはしばらくの間勢力を衰退させたと考えたのである。ところが、当初6世紀と考えられていたテオティワカンの滅亡が、実際はもう1世紀遅くなることわかったこと、この説は成立しなくなった。ティカル衰退の経緯が明らかになったのは、1980年代後半である。ベリーズのカラコルCaracol遺跡で発見された祭壇に刻まれた碑文の解読により、石碑建立が行われなくなる直前に、ティカルはカラコルと戦って敗れたことが判明したのである。すなわち、他国との敗戦がティカル衰退の原因だったのである。ところが、碑文解読が進展するにつれて、更に複雑な状況が浮かび上がってきた。確かにティカルはカラコルと戦って敗れたが、そのカラコルの背後により巨大な存在がいたことがわかったのである。それがカラクムルである。すなわち、ティカルはカ

ラクムルとの覇権争奪の争いに敗れ、長期間勢力を失墜させたのである。こうして、古典期にはティカルに比肩するもう一つの大国カラクムルが存在していたことが明らかになったのである。

ただ、研究の歴史が比較的浅いことと、カラクムル自体に必ずしも文字資料が豊富に残っていないこともあって、カラクムルの歴史はそれほど詳細にわかっていない。しかし、古典期マヤ社会において及ぼしたその影響力の大きさを鑑みると、カラクムルの歴史を解明することは古典期マヤ社会の形成・発展・衰退の過程を考察する上で不可欠であるといえる。そこで本稿では、これまでに発表された資料を用いてカラクムルの王朝史を整理し、カラクムルが古典期マヤの諸国家とどのような関係を持ち、どのような役割を演じたのかを可能な限り明らかにしたい。次章以降では、カラクムルの歴史を便宜的に形成期、発展期、絶頂期、衰退期と区分して述べていく。

## 2. 形成期

カラクムルとは「二つの隣り合うマウンド」という意味であり、起源が先古典期にまでさかのぼる建築物Ⅰ、建築物Ⅱという巨大なピラミッド型建築があることに由来する (Carrasco 1998 : 381)。古典期に用いられた紋章文字が蛇の頭の形をしていることから、カラクムルはカーンKaanあるいはカンKanすなわち「蛇」という国名で知られていたようである (Martin 2000 : 41 ; Martin and Grube 2000 : 101)<sup>2)</sup>。このカラクムルの紋章文字は、出現頻度の点でも分布範囲の点でも古典期の他のどの国家も凌駕している (Braswell et al. 2004:162)。このことは、最盛期のカラクムルの力がいかに強大で影響力が強かったかを如実に物語っている。

この地に人々が居住を開始したのは先古典期中期にさかのぼる (Folan et al. 1995 : 316)。政治的に重要な勢力になるのは先古典期後期に入ってからであり、カラクムルより早く巨大都市が建設されたナクベNakbeやエル・ミラドールEl Mirador、更に古典期に入って覇権を競い合うティカルと共に、マヤ南部低地の主要国家に成長する (Pincemin et al. 1998 : 312)。建築の点を見ても、建築物Ⅱはこの時期に既に現在の高さである55mに達している (Carrasco et al. 1999 : 49)。巨大都市としての相貌を明確にし始めたといえる。

カラクムルにいつ王朝が成立したのか明白ではない。この点について手がかりになるかも知れないのが「王朝土器Dynastic Vase」である。これは王の即位に関する事柄がコデックス型式の文字で描かれた容器であり、現在11出土している (Martin and Grube 2000 : 102)。その中には「空を持ち上げる者Skyraiser」に始まる19人の王の即位を記しているものもある。ただ、長期計算法による日付が記されていないため、いつの時代に統治していたかを特定することは難しい。しかも、存在したことが判明している王の名が欠落していたり、逆にモニュメントの碑文に刻まれた名前とは馴染みのないものも含まれており、実際の王について記したものではなく、伝説的な事柄なのではないかともみられている (Martin 2000 : 41)。神武天皇を創始とする日本の初期の天皇の神話的物語にたとえられるかも知れない。

これには異論もある。先古典期後期についての記述はかつて存在した王の懐古的記録であり、た

だそれはカラクムルのものではなく、エル・ミラドールのものではないかというのである (Sharer 2006 : 259-261)。先古典期後期の間、エル・ミラドールがカラクムルにとってライヴァルの存在であり、その滅亡がカラクムル発展の契機になったとの見方もあるが (Folan et al. 1995 : 310・329)、他方重要なのはこの両都市がサクベsacbeでつながっていたとの指摘である (Folan et al. 1995: 311 ; Sharer 2006 : 252)。両者の関係は敵対的というよりもむしろ友好的関係にあった、少なくとも非軍事的な意味合いの交流があった可能性が想定できるのである。このことは、エル・ミラドールを代表する建築物であるエル・ティグレEl Tigreグループ (図1) とカラクムル最大の建築物Ⅱ (図2) が規模の点でも形態の点でもきわめて類似していることから窺える。建築物だけでなく、そこで出土する土器にも非常に類似性が見られる (Carrasco 1998 : 317)<sup>⑧</sup>。しかも、これら「王朝土器」が製作されたのは、カラクムル周辺ではなくエル・ミラドール盆地周辺なのである (Martin and Grube 2000 : 102)。従って、「王朝土器」に描かれた王の即位は、エル・ミラドールの王朝にかかわっている可能性がある。エル・ミラドールとカラクムルは、従来考えられていたよりずっと密接な関係にあったのかも知れない。たとえば、エル・ミラドールが何らかの原因で滅びた後、都市を放棄した王族が新たな王権の本拠地として移り住んだのがカラクムルであったということも考えられる。

いずれにせよ、この時期のカラクムルの支配層については、文字史料が欠如しているため判然としない。ただ、同時代のライヴァルであるティカルでは王朝が成立して久しいことと、既に先古典期後期には建築物Ⅱのような高さの点でも体積の点でも巨大な建築物<sup>⑨</sup>が建設されていることを考え併せると、大規模な労働力を動員できるだけの強制力を持った支配体制が既に確立されていたと考える方が自然である。

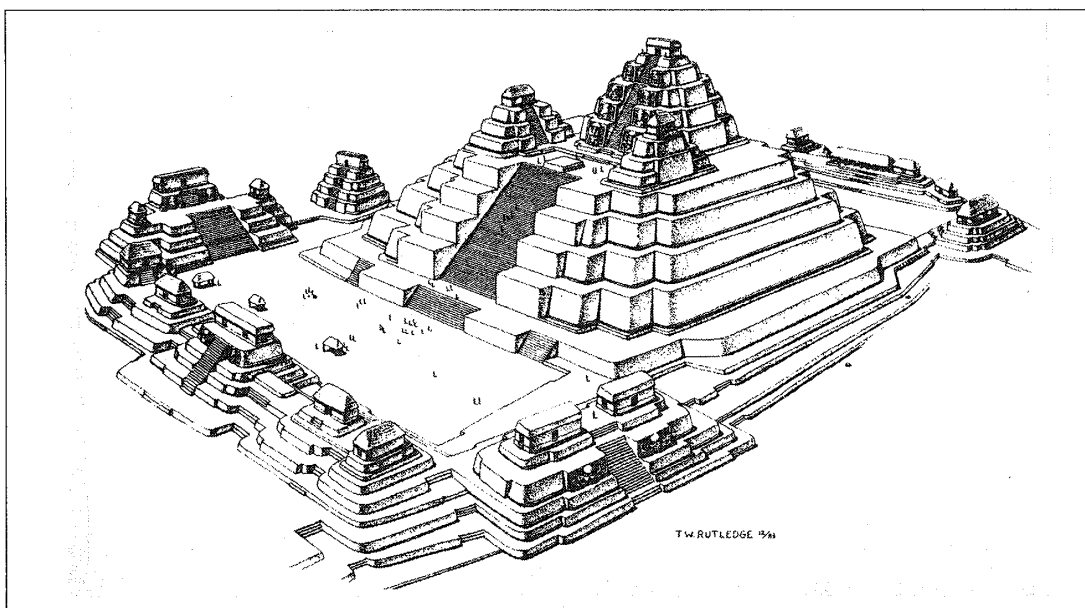


図1 エル・ミラドールのエル・ティグレ・グループ  
(Sharer 2006 : 図6.19より)

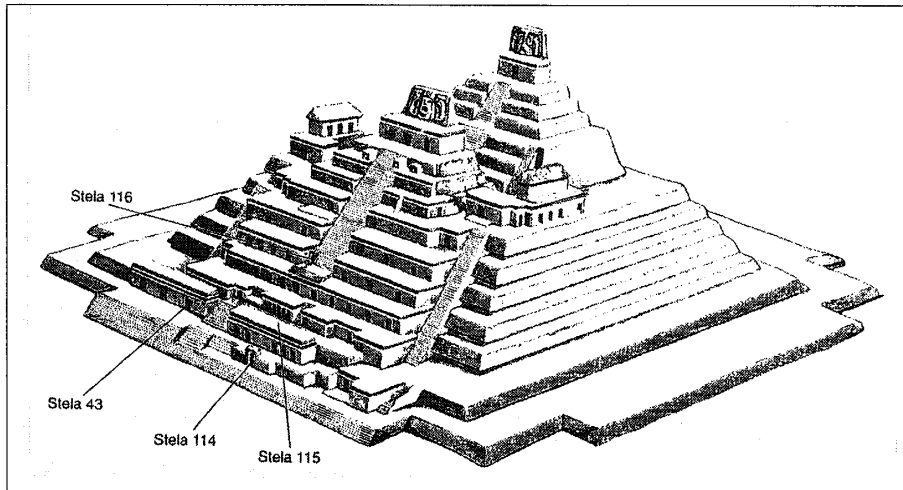


図2 カラクルの建築物Ⅱ  
(Pincemin et al. 1998 : 図3より)

### 3. 発展期

現在のところ、名前が判明している最初のカラクムル王はユクヌーム・チェーンYuknoom Ch'een I世である。しかし、彼の名前もカラクムルではなく、ツイバンチェDzibanche遺跡の階段の蹴上げに、捕縛された数人の捕虜の描写と彼らの名前や捕縛の日付と共に生起している (Martin and Grube 2000 : 103)。日付のうち二つは5世紀のものと考えられているので<sup>8)</sup>、その頃統治していた王なのであろう。

1994年にカラクムルで発見された石碑114 (図3) にも、この頃の王と思われる人物の肖像が刻まれている (Carrasco 1998 : 325-326・329)。8.19.15.12.13 (431年9月12日) という明らかに何らかの歴史的出来事を表すと見られる日付が刻まれたこの石碑は、正面には豪華に着飾った王が描かれ、残る三面には文字テキストが刻まれているという点で、同時代に建立されたティカルの石碑31 (図4) との類似性が指摘されている (Pincemin et al. 1998 : 311・315)。石碑31は9.0.10.0.0 (445年10月17日) 頃に建立されているので (Jones 1991 : 108)、石碑114とほぼ同時代ということが出来る。石碑31に描かれたティカルのシヤフ・チャン・カウィールSiyaj Chan K'awiil II世は、8.18.15.11.0 (411年11月26日) に即位し9.1.0.8.0 (456年2月3日) に死去している (Martin and Grube 2000 : 34)、石碑114に刻まれた人物は同時期に治世を持っていたことになる。ただ、右手に握っているのが、石碑31の頭飾りに

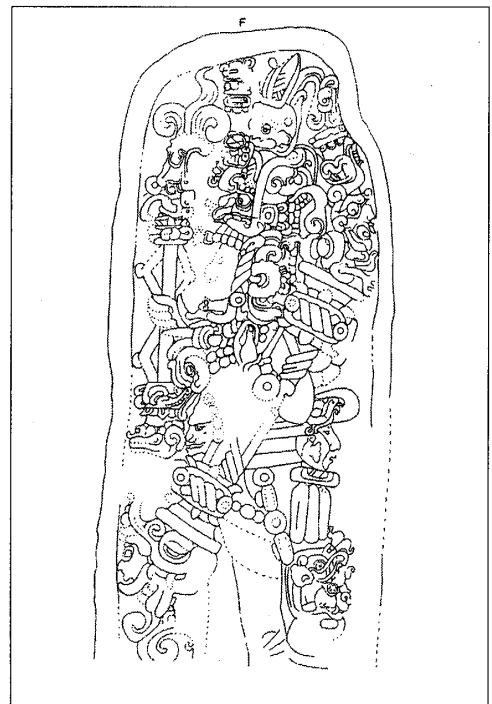


図3 カラクムの石碑114  
(Pincemin et al. 1998 : 図6より)

対して石碑114では笏になっているので、この点ではティカルの石碑40 (図5) により類似しているといえる。石碑40もほぼ同時代の9.1.13.0.0 (468年1月20日) に建立されている。いずれにしても、この頃カラクムルはティカルと同様の石碑彫刻伝統を共有していたことがわかる。石碑建立は王権の象徴的行為と考えられるので、石碑彫刻の類似性はカラクムルにもティカルと同様の支配体制が成立していたことを示唆していると思われる。

時代は少し下るが、カラクムルに王権が成立していたことを示唆する資料は、ツイバンチェの北方にあるエル・レスバロンEl Resbalon遺跡にも見出せる。ここの石段に刻まれた文字テキストから、529年にこの都市がカラクムルの支配下にあったことがわかっている (Martin and Grube 2000 : 103-104)。その少し前の9.4.0.0.0 (514年10月16日) に、カラクムルで石碑43が建立される (Carrasco 1998 : 326)。120近い石碑が建てられたカラクムルだが、古典期前期のものは先述した石碑114とこの石碑43だけである。建築物Ⅱのような巨大建築を有し、ツイバンチェやエル・レスバロンのような離れた都市にまで支配域を拡大していたことや、古典期後期に入って爆発的に多数の石碑を建て始めることを鑑みると、この古典期前期の石碑の乏しさはいささか奇異に思える。石碑建立という慣行自体、カラクムルに先行する巨大都市であるナクベやエル・ミラドールで既に行われており、決して真新しいことではなかったのに加えて、現在のところ最古の石碑114がティカルの石碑ときわめて類似した完成した形態で製作されているだけに、なおさらこの石碑建立への関心の薄さは不可解である。当時の支配層が、石碑を建てるという行為に重要性を感じていなかったということであろうか。

カラクムルの勢力伸張が顕在化するのにはトゥーン・カブ・ヒシュTuun K'ab'Hix王の治世からである。ヤシュチランYaxchilanの建物12のリントル35のテキストによると、カラクムル王の一家臣が同地で9.5.2.10.6 (537年1

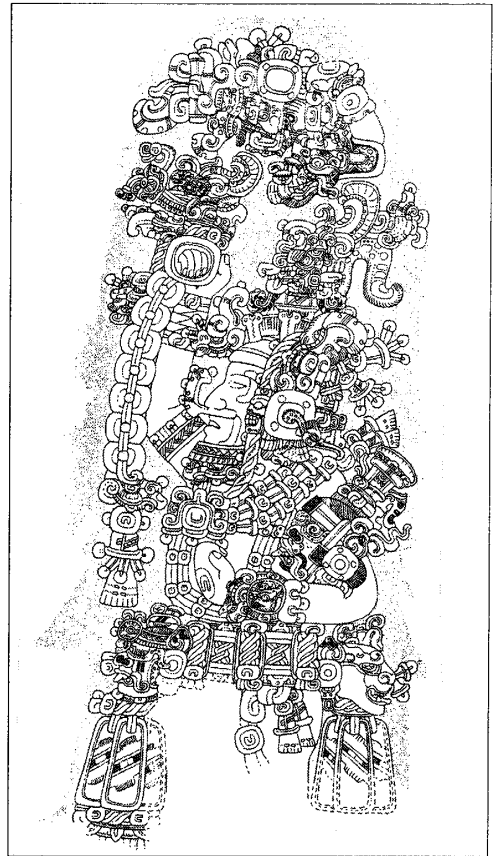


図4 ティカルの石碑31  
(Harrison 1999 : 図51より)

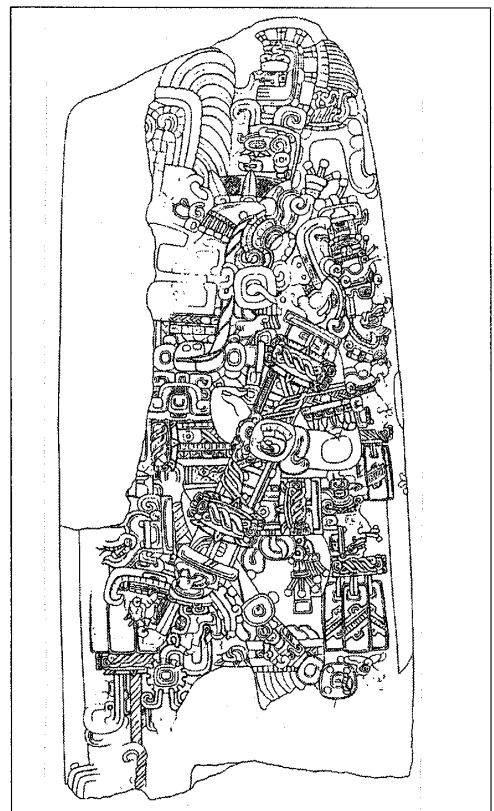


図5 ティカルの石碑40  
(Harrison 1999 : 図53より)

月16日)に第10代王キニチ・タトブ・スカルK'inich Tatb'u Skull II世が催した儀式に参加している (Carrasco 1998 : 381, 2000 : 17; Folan et al. 1995 : 326; Schele and Freidel 1990 : 175)<sup>6</sup>。ウィナルwinalやキンkinの係数が0でなく、それぞれ10と6という半端な数であることから判断して、カトゥン完了のような何かの節目や記念日に祝われる儀式ではなく、何らかの歴史的な事柄の執行にかかわると考えられる。恐らく新しい王の即位の儀式が執り行われたのであろう。いずれにしても、このことからカラクムルの対外関係が、少なくとも6世紀にはペテンを越えてウスマシントUsumacinta川流域まで広がっていたことが窺える。

カラクムルが他国を支配下においた最初の具体的な事例は、ナランホNaranjoの石碑25に見られる。9.5.12.0.4 (546年5月5日)、トゥーン・カブ・ヒシュ王はカラクムルの領国内でナランホの第37代王<sup>7</sup>アフ・ウォサルAj Wosalの即位を主宰しているのである (Carrasco 1998 : 381, 2000 : 17; Folan et al. 1995 : 326; Martin 2000 : 41; Martin and Grube 2000 : 71-72・104; Schele and Freidel 1990 : 175)。カラクムルの勢力が及ぶ範囲は、ツイバンチェやエル・レスバロンのような北方だけでなく、南方にまで拡大してきたのである。そしてそれは、後にナランホの更に南にあるカラコルCaracolとの同盟関係につながってくる。

トゥーン・カブ・ヒシュ王が始めた拡大政策は、次の「空の目撃者Sky Witness」王によって更に推進される。彼の名が初めて生起するのはロス・アラクラネスLos Alacranesの石碑で、彼は同地の王を即位させたようである (Martin 2000 : 41; Martin and Grube 2000 : 104)。しかし、彼の治世で最も重要な出来事は、ティカルとの抗争である。そしてそこに介在するのがカラコルなのである。カラコルの祭壇21に刻まれたテキストによると、当時カラコルの王であったヤハウ・テ・キニチYajaw Te' K'inich II世は9.5.19.1.2 (553年4月16日)にティカル王ワク・チャン・カウィールWak Chan K'awiilの後援で即位したことからわかるように (Martin and Grube 2000 : 39・88-89)、もともとカラコルはティカルに従属していた。ところがこの政治的支配・従属関係は間もなく破綻した。ヤハウ・テ・キニチII世は、即位のわずか3年後にいわば宗主国に当たるティカルに反旗を翻して敗れるのである。このティカルへの攻撃には、当時台頭しつつあったカラクムルの存在が大きいかかわっていると思われる。事実、562年4月に「星戦争」を仕掛けたヤハウ・テ・キニチII世はワク・チャン・カウィールを打ち破るが、この戦勝の真の主導者はカラクムルの「空の目撃者」王だったようなのである。この後ティカルが130年という長期にわたって石碑が建立されない「中絶期hiatus」(Willey 1974)とも呼ばれる暗黒時代に陥ったのは、先述した通りである。これ以降、ティカルとの戦いに勝利したカラクムルは、マヤ南部低地最大の国家として君臨することになるのである。

「空の目撃者」王の名は、北部低地のオコプOkop遺跡の日付のないモニュメントにも生起している (Martin 2000 : 43; Martin and Grube 2000 : 104)。オコプはエル・レスバロンよりも更に100km以上北方に位置する遺跡であり、周辺には主要な遺跡は存在しない。いわば孤立したような存在の遺跡であり、そのような重要度が低いと考えられる都市で「空の目撃者」王の名が言及され

ているということは、それだけ当時のカラクムルの勢威が強かったことを示すものであろう。

599年4月21日のパレンケ攻撃の主導者として彼の名前がパレンケの碑銘の階段に生起しているが (Carrasco 1998 : 382, 2000; Martin and Grube 2000 : 104・159-160)、「最初に斧を振る者 First Axewielder」王が9.7.0.0.0 (573年12月5日) のカトゥン完了を祝っていることと、従って572年のカラコルにおける彼の名の最後の生起が彼の死への言及と推測されることから、このことは史実とはみなしがたい。恐らくは後で述べる「渦巻き蛇 Scroll Serpent」王と混同したのであろう。

先述したように、「空の目撃者」王の後継者「最初に斧を振る者」王がカトゥンの終了を祝ったことがツイバンチェのモニュメントに記されているので、彼は前王の死後間もなく王位を継いだものであろうが、彼の治世は短かった。カラクムルの石碑33によると、その6年後の9.7.5.14.17 (579年9月2日) 新しい王「渦巻き蛇」が即位する (Martin 2000 : 43; Martin and Grube 2000 : 105)。彼の治世に、カラクムルの勢力は更に拡大することになる。そのことを最も如実に表しているのがパレンケへの二度にわたる攻撃である。599年4月21日に、彼はヨール・イクナル女王 Lady Yohl Ik'nal 治下のパレンケを初めて攻撃し、都市を略奪する (Martin and Grube 2000 : 159-160)。その12年後の611年4月4日、今度はアフ・ネ・オフル・マツ Aj Ne' Ohl Mat 王治下のパレンケを再度侵略する (Martin and Grube 2000 : 160-161)<sup>8</sup>。翌年の9.8.19.4.6 (612年8月8日) にアフ・ネ・オフル・マツが死去し、それに先立って同年3月にヨール・イクナル女王の次男か夫と推測されているハナーブ・パカル Janaab' Pakal という名の人物が死去したことが、パレンケの碑銘の神殿の東パネルのテキストに記されているが、これは恐らく捕虜になった両者がカラクムルによって供犠に供されたものであろう。この二度目の敗戦は決定的なダメージを与えたようであり、パレンケでは男系の王統が断絶している。マヤ地域内でも西の辺境に近く、カラクムルからは遥かに遠く離れたパレンケにまで軍事的侵入を行ったという事実は、ティカルを衰退にもたらしたカラクムルの力がいかに強大であったかを物語っている。カラクムルはマヤ低地南部における唯一の「超大国」に成長したといっても過言ではなからう。

しかし、続く王ユクヌーム・チャン Yuknoom Chan の事績は詳らかでない。唯一判明している事績はカラコルの石碑3に記されていることのみであり、それによるとユクヌーム・チャンは9.9.5.13.8 (619年1月9日) にカラコル王カン K'an II 世が挙行した何らかの行事を監督している (Folan et al. 1995 : 326; Martin 2000 : 43; Martin and Grube 2000 : 106; Schele and Freidel 1990 : 174)。この王の治世も短命だったようであり、9.9.9.0.5 (622年3月28日) には次のタフーム・ウカブ・カック Tajoom Uk'ab' K'ak' が即位している。この王も9.9.17.11.4 (630年10月1日) に死去しているので、治世は8年しか続いていない。しかし、カラクムルの外交関係に関して重要な出来事が生じている。546年にトゥーン・カブ・ヒシュ王が政治的支配下においたナランホとの関係が崩壊したのである。そのことを端的に示すのが、カラコルとナランホの戦闘である。カラクムルの同盟国であるカラコルのカン II 世は、626年5月と8月の二度にわたってナランホを攻撃し、これを打ち負かしている (Martin and Grube 2000 : 72・92)。この戦争で捕獲した捕虜

の供犠にかかわると思われる球戯がタフーム・ウカブ・カックの主宰で執り行われているので、カラコルのナランホへの攻撃にはカラクムルの後援があったものと考えられる。

対ナランホ戦にカラクムルが直接かかわっていた記録が現れるのは、次のユクヌーム頭王の治世である。彼は631年12月24日にナランホに「星戦争」を仕掛け、ナランホを征服する (Martin and Grube 2000 : 72・106)。9.10.10.0.0 (642年12月4日) のカトゥン完了を祝ってカンII世の命でナランホに建築された碑銘の階段の記録によると、敗戦後ナランホ王は 'k'hxaj' すなわち「拷問にかけられ」あるいは「食べられ」ている (Martin 2000 : 43; Martin and Grube 2000 : 72-73; Schele and Freidel 1990 : 178)<sup>9</sup>。ユクヌーム頭王は636年にも未特定の国に対する征服活動を行っているが、その最中に死去したと思われる。というのも、ラ・コロナLa Coronaで発見された石碑に、ユクヌーム頭王が征服活動を始めた年の9.10.3.5.10 (636年) に新しい王が即位したことが記されているからである (Martin and Grube 2000 : 108)。

#### 4. 絶頂期

ユクヌーム大王と綽名されることもある新王ユクヌーム・チェーンII世は、前王が始めたこの征服活動を受け継いだのみならず、カラクムルを全盛期に導く。50年の長きにわたって統治した彼の治世には、多くの建築計画が推進され、また18もの石碑が建立されたが (Martin and Grube 2000 : 108)、最も重要な出来事として挙げられるのが対ティカル政策である。彼は、ティカル王朝内の内紛に介入し、ティカルの更なる弱体化を図ったのである。ティカルを追放され、ドス・ピラスDos Pilasと現在呼ばれる遺跡に新たな根拠地を築いて真のムタルMutal王を自称したバラフ・チャン・カウィールB'alaj Chan K'awiilを援助し、彼が遂行したティカルのヌーン・ウホル・チャークNuun Ujol Chaakとの戦争に加担するのである。バラフ・チャン・カウィール自身が碑銘の階段のテキストに自らをユクヌーム・チェーンII世の 'yajaw' 「臣下」と称していることから (Martin 2000 : 43; Martin and Grube 2000 : 56-57)、彼がカラクムルに臣従していたことは明白であり、その後楯を頼りにティカルとの戦いを続けたのである。

カラクムルとティカルとの戦争は、657年1月にユクヌーム・チェーンII世がティカルに対して起こした「星戦争」に始まる。この戦争に敗れたヌーン・ウホル・チャークは、しばらくの間逃亡を余儀なくされる (Martin and Grube 2000 : 42・57・109)。興味深いことに、この戦いの2年後にヌーン・ウホル・チャークはパレンケの最盛期を現出したキニチ・ハナーブ・パカルK'inich Janaab' Pakal王に伴われてパレンケを訪れている (Martin and Grube 2000 : 165)。カラクムルに二度も侵略を受け、王位継承に支障をきたすほどの打撃を受けたパレンケに、同じカラクムルの略奪を被ったばかりのヌーン・ウホル・チャークが現れているというのは意味深長である。ヌーン・ウホル・チャークにとって、当時キニチ・ハナーブ・パカルによって強国に成長したパレンケは、自らの返り咲きを図る上で魅力的な存在だったであろうし、逆にキニチ・ハナーブ・パカルにとっては、ヌーン・ウホル・チャークがティカルに復権してカラクムルに対抗することで自国



の安寧を保つことができるので、やはりヌーン・ウホル・チャークとの友好関係の締結は重要であったであろう。いわゆる遠交近攻である。パレンケの後楯が効を奏したのか、ヌーン・ウホル・チャークは672年にドス・ピラスを陥れ、ペテシュバトゥンPetexbatun地域を支配下に置く(Martin and Grube 2000 : 42-43)。しかし、その5年後ユクヌーム・チェーンII世はティカルを攻めて破り、更に2年後の679年再度ティカルを攻撃し、決定的な敗北を与える。このように、ユクヌーム・チェーンII世はその長い治世の中で、ティカルの弱体化に力を注ぐことになるのである。こうしてユクヌーム・チェーンII世の後援でヌーン・ウホル・チャークとの戦いを継続できたバラフ・チャン・カウィールは、9.12.10.0.0 (682年5月8日)にユクヌーム・チェーンII世が催した恐らくはカトゥン完了記念と思われる行事の際の儀礼ダンスに参加して忠誠を表している。この忠誠はユクヌーム・チェーンII世の死後も続いたようであり、彼は次王の即位にも立ち会っている(Folan et al. 1995 : 327; Pincemin et al. 1998 : 323; Schele and Freidel 1990 : 181-183)。

ユクヌーム・チェーンII世の富国策は、ティカルへの攻撃だけではない。周辺の国々を支配下に置くことにも気を配っている。エル・ペルーEl Peru王キニチ・バラムK'inich B'alamの即位を監督し、更に王女をキニチ・バラムに嫁がせたのもその一例である(Martin and Grube 2000 : 109)。エル・ペルーはウスマシタ川の支流サン・ペドロ・マルティルSan Pedro Martir川沿いに位置しているので、ここを押さえることはウスマシタ川流域の諸国へ睨みをきかす上で効果的であったであろう。662年、同じサン・ペドロ・マルティル川下流域のモラルMoralという国の王の即位に際しても、ユクヌーム・チェーンII世自らか臣下がかかわっているが、これも同様の事情を示すものであろう。更に、カラクムルの南方約245km、パシオンPasion地域にあるカンクエンCancuen王国も支配下に入れ、三代にわたる王のうち少なくとも二人を656年と677年に王に擁立している。トゥーン・カブ・ヒシュ王の治世下の537年に臣下の一人がヤシュチランで行われた儀式に参加したことは先に記したが、ユクヌーム・チェーンII世の治世でも685年に一人の臣下が同じウスマシタ川流域のピエドラス・ネグラスPiedras Negrasで催された何らかの儀式を監督している(Martin and Grube 2000 : 144)。この当時ピエドラス・ネグラスは「2王」の治世であり、少なくとも一時的にはヤシュチランも含めウスマシタ川上流域に支配域を広げていたようである(Martin and Grube 2000 : 122-123)。従って、ピエドラス・ネグラスで行われた儀式をカラクムルの臣下が監督したということは、カラクムルが依然としてウスマシタ川流域における勢力を保っていたことを示していると思われる。

50年の長きにわたって王位に座り、マヤ低地南部に大きな政治的支配力を行使してきたユクヌーム・チェーンII世の治世も、686年の初めにようやく終りを告げ(Martin 2000 : 43)、その年の9.12.13.17.7 (686年4月3日)に新王ユクヌーム・イチャーク・カックYuknoom Yich'aak K'-ak'が即位する(Braswell et al. 2004 : 169; Carrasco 1998 : 384, 2000 : 17; Carrasco et al. 1999 : 49; Martin 2000 : 43; Martin and Grube 2000 : 110)。彼の即位もカラクムル本国でなく、従属国のエル・ペルーの石碑13とドス・ピラス石碑30の記録から判明している(Schele and

Freidel 1990 : 182)。「大王」ユクヌーム・チェーンⅡ世の死という重大事の後も、新王が勢威を保っていたことが窺える。

ユクヌーム・イチャーク・カックの業績として重要なのは、わずか5歳のカック・ティリウ・チャン・チャークK'ak' Tiliw Chan Chaakをナランホの王位につけたことであろう。631年にユクヌーム頭王によって征服されたナランホであったが、その後復興して支配を脱し、680年2月にはカラコルに「星戦争」で勝利し、その首都オシュウィツァOxwitza'を陥落させるなど一時は勢力を回復する (Martin and Grube 2000 : 73・94-95)。これ以降118年もの間カラコルの記録は途切れることから、この敗戦によりカラコルが深刻な打撃を被ったことが窺える。しかし、ナランホの復興は短命であった。カラコルへの勝利のわずか2年後の682年8月27日に、ドス・ピラスのバラフ・チャン・カウィールの娘「6の空Six Sky」がナランホに「到着」するのである (Martin and Grube 2000 : 74)。この「到着」という語がマヤのテキストに生起する場合はきわめて意味深長であり、ティカルにおける「エントラーダentrada」に見られるように多分に王朝の交替にかかわっている<sup>9)</sup>。しかも、ドス・ピラスはカラクムルの忠実な同盟国であり、先にも述べたようにカック・ティリウ・チャン・チャークの即位の儀式に際してはバラフ・チャン・カウィール自らが列席しているほどなのである。カラコルを破ることで一旦はカラクムル陣営の軛から脱したナランホではあるが、恐らくはその直後に報復を受けて壊滅的な損害を被り、カラクムルの従属国ドス・ピラスの王家によって王位を篡奪されるに至ったのであろう。しかし、その背後で実質的にナランホを支配下においたのはカラクムルである。それを示すのがナランホの石碑1の碑文であり、ここにはカック・ティリウ・チャン・チャークがカラクムルの神聖王ユクヌーム・イチャーク・カックの'yajaw'と記されている (Martin and Grube 2000 : 75)。つまり、ドス・ピラスの王女「6の空」の息子であるカック・ティリウ・チャン・チャークをユクヌーム・イチャーク・カックが即位させることは、ナランホがカラクムルの勢力範囲に組み込まれたことを顕示しているのである。

ユクヌーム・チェーンⅡ世とユクヌーム・イチャーク・カックの二人の王の治世がカラクムルの最盛期であり、都市の中心部1.75km<sup>2</sup>には975の建築物が建てられ、それを取り囲む30km<sup>2</sup>の範囲には6250の建築物が確認されている (Braswell et al. 2004 : 167; Folan et al. 1995 : 310, 2001 : 227)。直接支配する領域は約13000km<sup>2</sup>にまで及び、175万人もの人口を擁していたと推測されている (Braswell et al. 2004 : 162・170-171)。これはティカルの面積12600km<sup>2</sup>、人口150万人を凌駕している。モニュメントの建立もきわめて活発であり、100以上もの石碑が652年から752年の百年間に建てられている (Braswell et al. : 168)。カラクムルは名実共にマヤ低地南部最大の覇権国家になったのである。

## 5. 衰退期

しかし、このカラクムルの絶頂も長くは続かなかつた。ワク・チャン・カウィールが「空の目撃者」王に敗れて以来長い低迷期に陥っていたティカルが、ここにきて復興するのである。そのこと

を記すのが、ティカルの神殿 I のリントル 3 のテキストであり、ここには

イチャーク・カックの火打石と盾は倒された (Martin and Grube 2000 : 110-111)

とある。すなわち、9.13.3.7.18 (695年8月8日) ティカルのハサウ・チャン・カウィール *Jasaw Chan K'awiil I* 世がカラクムルのユクヌーム・イチャーク・カックを攻撃し、打ち破るのである。ティカルの敗戦の少し前、9.13.2.16.10 (695年1月29日) にナランホがティカルと戦ってシヤフ・カウィール *Siyaj K'awiil* という恐らくは高位の臣下を捕らえているので、ティカルとカラクムルの戦いも単独のものではなく、周辺の同盟国も巻き込んだ大規模なものだったのであろう (Martin and Grube 2000 : 76)。いずれにしてもこの結果、カラクムルの戦争指導者たちが捕虜にとられて犠牲に供され、加えてカラクムルの守護神像の一つヤハウ・マーン *yajaw maan* がティカル軍に捕獲されていることから、カラクムルにとって大敗であったことが推測できる (Carrasco 2000 : 17・19)。

ただし、この敗戦の結果、カラクムルが急速に衰えたとは考えられない。一つには、建築物 II で発見された墳墓 4 が豪華であることである。被葬者が享年45~60歳ほどのがっちりした体の男性で、出土した皿にユクヌーム・イチャーク・カックの文字を含む句が描かれていることから、ユクヌーム・イチャーク・カックその人の奥津城と考えられているのだが、カラクムルで最も精巧に造営された墓であり、持ち送り式天井に代わって湾曲したアーチ型天井が取り付けられるなど新しい建築要素の導入も見られ (Braswell et al. 2004 : 169; Carrasco 1998 : 384, 2000 : 19; Carrasco et al. 1999 : 52-56; Martin and Grube 2000 : 111)、そこには国力の急速な衰えは感じられない。二つには、外交関係が維持されていることである。ドス・ピラスと702年、エル・ペルーとヤシュチランと741年に何らかの儀式を共催していることから (Carrasco et al. 1999 : 49)、少なくとも一定の勢力を保っていたことが見て取れる。ただ、以前のように「唯一の超大国」のような地位を保つことはできなくなり、復興したティカルの前に次第に勢力を相対的に弱めていくのである。

ハサウ・チャン・カウィールの墳墓で出土した一対の骨に、カラクムルの新王として「裂けた大地 *Split Earth*」という名が刻まれているが、695年の11月まで少なくとも権力の座にあったとみられている (Martin 2000 : 44; Martin and Grube 2000 : 111; Schele and Fredel 1990 : 213)。ユクヌーム・イチャーク・カックとは明らかに異なる人物であること、ティカルに敗れた後の王位に即していること、そして戦勝国の王の墓の副葬品に名前が残されているということから、カラクムルがティカルに一時的に占拠された際にたてられた傀儡の王なのかも知れない。

続くユクヌーム・トーク・カウィール *Yuknoom Took' K'awiil* は、702年に七つの石碑を建立していることと<sup>⑩</sup>、同年ドス・ピラスのテキストでその名が言及されていることから、少なくともこの年までには即位していたことがわかる (Martin and Grube 2000 : 112)。彼がエル・ペルーの王の即位を監督していることや、ナランホのカック・ティリウ・チャン・チャークが711年にもカラクムルへの忠誠を記録に留めていることは (Martin and Grube 2000 : 77)、カラクムルを盟主とする同盟が依然として存続していたことを示している。9.15.0.0.0 (731年8月20日) にコパン

Copan王ワシクラフーン・ウバーフ・カウィールWaxaklajuun Ub'aah K'awiilが建立した石碑Aに、コパンの紋章文字と共に、カラクムル、ティカル、パレンケの紋章文字が生起している (Fash 2001 : 58・182; Marcus 1976 : 16-19; Newsome 2001 : 63・177-179)。当時ティカルはハサウ・チャン・カウィールにより力強く復活し、絶頂期を迎えた頃であり、またパレンケとコパンもそれぞれマヤ低地南部の南西部と南東部を代表する国家であることを考慮に入れると、この石碑はカラクムルがマヤ世界の四大主要国の一つとみなされていたことを示しているのかも知れない。

しかし、734年カラクムルは再びティカルに大敗を喫する。ティカルで731年から736年の間に奉納されたと見られる祭壇に捕縛された捕虜の姿が刻まれているが、これは捕らえられたユクヌーム・トーク・カウィールではないかとの指摘がなされている (Martin and Grube 2000 : 113)。この戦争時のティカルの王がハサウ・チャン・カウィールなのかあるいはその後継者であるイキン・チャン・カウィールYik'in Chan K'awiilなのかはわかっていないが、イキン・チャン・カウィールは少なくとも743年にエル・ペルー、744年にはナランホを攻撃し、破っている。こうしてカラクムルの政治圏は完全に崩壊するのである。

そのことと関連するかも知れないのが、カラクムルの北方のリオ・ベックRio Bec地域の動向である。この地域では、古典期後期の終わり頃になって、リオ・ベック、オルミゲーロHormiguero、チカンナChicanna、シュプヒルXpujil、ベカンBecanなどの都市で新たな建築様式が見られるようになるのだが、これはカラクムルの支配力が衰えたために周辺の都市が活性化した表れなのかも知れない (Martin 2000 : 44; Martin and Grube 2000 : 115)。

カラクムルの政治圏が瓦解したこの頃、カラクムルの別の王の名がマヤ低地南部の東南端のキリグアーQuiriguaで生起しているとの指摘がある。736年に、2年後のコパンに対する反乱に関連してワマウ・カウィールWamaw K'awiilと読める人物が「チーク・ナーブChiik Naab'の神聖王」として言及されているのだが、これはカラクムル王を指すのではないかというのである (Martin and Grube 2000 : 114・219)。

741年には名前を解読できない「Y王」が五つの石碑を建立している (Martin and Grube 2000 : 114)。先に述べたように、その後間もなく支配下にあったエル・ペルーやナランホがティカルに敗れることからわかるように、カラクムル政治圏の衰弱は着実に進行していたことから、この旺盛な石碑建立活動をもってカラクムルの力が復活していたとはみなしがたい。

続く「Z王」の名も判読できないのだが、彼も9.16.0.0.0 (751年5月7日) にカトゥン完了を記念して石碑62を建立している (Martin and Grube 2000 : 115)。

治世が短い王が続いた後に現れたボロン・カウィールB'olon K'awiilは、751年頃には既に即位し、少なくとも9.17.0.0.0 (771年1月22日) のカトゥン完了を記念して石碑57と石碑58を建立する771年までは権力の座にあったようである (Martin and Grube 2000 : 115)。マヤ低地南部の南西部に位置するトニナーToninaのモニュメント20に、789年にポモイPomoyと戦って捕虜を捕えたと

の記述があるのだが、この捕虜をボロン・カウィールの家臣と記している（Martin and Grube 2000 : 189）。この記述が正しければ、ボロン・カウィールの治世は更に長かったことになる。

他国で名を言及される最後の王はチャン・ペットChan Petである。パシオン川流域のセイバルSeibalの石碑10には、チャン・ペットがティカル、モトゥール・デ・サン・ホセMotul de San Joseの王とともに10.1.0.0.0（849年11月28日）のカトゥン完了の儀式に立ち会ったことが記されている（Folan et al. 1995 : 329; Martin and Grube 2000 : 115; Schele and Mathews 1998 : 185-187）。この四国をマヤ世界の東西南北の各方位を代表する国家を表すとの解釈がマーカスの提唱以降なされてきたが（Marcus 1976 : 16-17）、かつては大国家だったティカルやカラクムルもこの時にはきわめて衰弱していたことを考えると<sup>8</sup>、この説は誂いがたい。低地南部が「崩壊」へと向かっていたこの時期、例外的に活発な活動を始めたセイバルの勢威の前に、敬意を表して参集したものであろう。

存在が判明している最後の王は、石碑61に肖像が刻まれているアフ・トークAj Took'である（Martin and Grube 2000 : 115）。刻まれた日付は判然としないが、10.4.0.0.0（909年1月18日）のカトゥン完了を記念して建てられた蓋然性が高い（Carrasco 2000 : 13; Sharer 2006 : 415）。この日付は、マヤ低地南部で長期計算法による日付が刻まれた最後の石碑であるトニナーのモニュメント101に生起するものと同じである。長期計算法で事績が記されるという古典期の伝統はまさに終焉を迎えようとしていたのである。その後も、カラクムルではいくつかの石碑が建立されるが、もはやかつての技術を偲ぶよすがもない粗雑なものになっている。そしてアフ・トークを最後に、カラクムルの王朝の存在は知られなくなる。低地南部の他の国々と同様に、カラクムルも「崩壊」の波に飲み込まれてしまうのである。

## 6. おわりに

カラクムルは、マヤ低地南部においていち早く王朝が成立し、古典期が終わる頃まで国家として存続したという点で、ティカルと並ぶ主要国といえる。時間的にも空間的にもきわめて広範囲にわたってマヤ低地南部の政治的な動きに関与し、しばしば他国に大きな影響をも及ぼし続けた。先古典期後期にナクベやエル・ミラドールに続いて巨大建築を建設したカラクムルは、両国の衰退後にはティカルと共に周辺に勢力を拡大し始める。その影響は6世紀に入るとウスマシタ地域にまで及ぶようになる。ティカルとの争いに勝利した後は、南西部のパレンケを侵略したり、南方のパシオン地域にまで支配域を拡大したりと、その勢力は一段と肥大する。最盛期には近隣のオシュペムルOxpemul、ラ・ムニェカLa Muñeca、ナーチトゥンNaachtun、ウシュルUxul、サシルハSasilhaなど20もの都市を支配し（Braswell et al. 2004 : 170）、更にはカラコル、ドス・ピラス、ナランホを始めとする国家を服属させた。こうして約13000km<sup>2</sup>もの版図を直接支配し、175万人もの人口を擁する覇権国家へと成長するのである。

カラクムルが覇権国家へと発展する重要な契機になったのがティカルへの戦勝であったように、

その衰退のきっかけもティカルとの戦いであり、7世紀の終り頃以降ゆるやかに勢力を弱めていく。そして9世紀に王国としてのカラクムルは終焉するようである。ただそれはカラクムルという一国の終焉にはとどまらず、低地南部の古典期社会全体の終焉であり、いまだ完全には原因が解明されていない「崩壊」の一環であった。

最盛期のカラクムルの影響が達した範囲は、低地南部の主要地域のほとんどに及んでいる。ということは、カラクムルの歴史は古典期の低地南部マヤ社会の歴史と密接に連動しているということである。換言すれば、カラクムルを抜きにして古典期マヤの歴史を語ることはできない不可欠の存在である。しかしながら、120もの石碑を有しているにもかかわらず、その大半が判読不能なため、カラクムルの歴史の多くは他地域で見つかった資料に依拠しているというのが現状である。そのため、カラクムルという巨大な存在がマヤの歴史に浮かび上がってきたのも、わずかこの20年ほどのことに過ぎず、その姿はまだ明瞭とはいえない。その長い歴史の多くは、遺跡が置かれている現状同様（写真1）依然として覆い隠されているといえる。

ただ、従来より明確になりつつあるのが、古典期マヤ社会がいかに戦争が蔓延する社会であったかということである。ボナムパックBonampakやムルチクMul-Chicの壁画に見られるような生々しい戦闘の光景は決して特殊な状況ではなく、パワー・ポリティクスが支配する現実社会の状況を反映しているといえる。カラクムルは古典期社会の不安定で複雑な国際関係の中でパワー・ポリティクスを用いて主導的な立場を構築し、覇権国家として隆盛を極めた後、ティカルのパワー・ポリティクスの前に敗れ衰退していくのである。

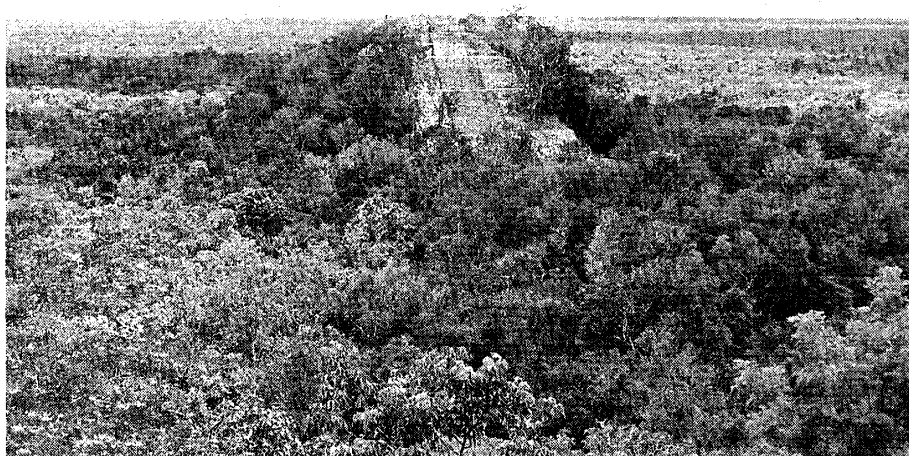


写真1 カラクムルの建造物Ⅱ  
(2005年 筆者提供)

- ① かつてウィリーは、これを「古典期マヤ文明崩壊」を予兆するものとして、「崩壊のリハーサル」と呼んだ（Willey 1974）。
- ② カラクムルのモニュメントには、オシュテトゥーンOxte'tuun「三つの石」、とチーク・ナーブChiik Naab' という地名が生起する。前者は都市としてのカラクムルを表し、後者は都市を含むより広い領域を表していたと考えられている（Martin and Grube 2000 : 104）。
- ③ ただ、ナクベの先古典期の建築物や土器とも類似している（Carrasco 1998 : 317）ことを考慮に入れると、この類似性は同時期のペテンPeten地方の大都市に共通するものかも知れない。
- ④ 高さ55m、底辺140m×140m。
- ⑤ ブラスウェルらによると一つは495年であり、これがカラクムル以外での遺跡でカラクムルについて言及した82の日付の中で最古である（Braswell et al. 2004 : 170）。
- ⑥ マーティンとグルーベは、カラクムルの女性の臣下が捕獲されたと解釈している（Martin and Grube 2000 : 104・121）。
- ⑦ この「37代」というのは、ナランホを建国した神から始まって37番目であるということであり、多分に神話的な系統を表すものである。日本の天皇の系譜にたとえられよう。
- ⑧ パレンケの碑銘の神殿の東パネルのテキストに、'cha' kaj lakamha' すなわち「ラカムハが斧で切られた」と解読できる一節がある（Martin and Grube 2000 : 160）。ちなみにラカムハとは「大水」という意味であり、都市としてのパレンケの古名である。国家としてのパレンケはバーカルB'aakal（「骨」）と呼ばれていた（Martin and Grube 2000 : 155・157）。
- ⑨ 仮に後者の解釈、すなわち「食べられ」たというのが正しければ、古典期マヤ社会では異例なことといえるが、恐らくは後世アステカ社会で行われたとされる儀礼的食人を指すものであろう。
- ⑩ ティカルの「エントラダ」に関しては、（佐藤 2004）を参照。
- ⑪ ユクヌーム・トーク・カウィールは、9.15.0.0.0（731年8月20日）にもカトゥーン完了を記念して七つの石碑を建築物Iの前に建立するなど、生涯に21もの石碑を建立した（Martin 2000 : 44; Martin and Grube 2000 : 112-113）。
- ⑫ カラクムルの支配下にあったオシュペムルOxpemulやラ・ムニェカLa Muñecaなどでこの頃から石碑建立活動が活発になるのも、カラクムルが権威を喪失したためであろう（Martin and Grube 2000 : 115）。

#### 引用文献

Braswell, Geoffrey E., Joel D. Gunn, María del Rosario Domínguez Carrasco, William J. Folan, Laraine A. Fletcher, Abel Morales López, and Michael D. Glascock  
2004 'Defining Terminal Classic at Calakmul, Campeche.' In *The Terminal Classic in the*

Maya Lowlands: Collapse, Transition, and Transformation, eds. Demarest, Arthur A., Prudence M. Rice, and Don S. Rice, pp.162-194. University Press of Colorado, Boulder.

Carrasco Valgas, Ramón

1998 'The Metropolis of Calakmul, Campeche.' In Maya, eds. Schmidt, Peter, Mercedes de la Garza and Enrique Nalda, pp.372-385. Rizzoli International Publications, Inc., New York.

Carrasco Valgas, Ramón, Sylviane Boucher, Paula Alvarez González, Vera Tiesler Blos, Valeria García Vierna, Renata García Moreno, and Javier Vázquez Negrete

1999 New Evidence on Jaguar Paw, a Ruler from Calakmul. Latin American Antiquity, vol. 10, No. 1, pp.47-58.

Fash, William L.

2001 Scribes, Warriors and Kings. Thames and Hudson Ltd., London.

Folan, William J., Joyce Marcus, Sophia Pincemin, María del Rosario Domínguez Carrasco, Laraine Fletcher, and Abel Morales López

1995 Calakmul: New Data from an Ancient Maya Capital in Campeche, Mexico. Latin American Antiquity, vol. 6, No. 4, pp.310-334.

Harrison, Peter D.

1999 The Lords of Tikal : Rulers of an Ancient Maya City, Thames and Hudson Ltd, London.

Jones, Christopher

1991 Cycles of growth at Tikal. In Classic Maya Political History: Hieroglyphic and Archaeological Evidence, ed. Culbert, T. Patrick, pp.102-127. School of American Research Advanced Seminar Series, Cambridge University Press, Cambridge.

Marcus Joyce

1976 Emblem and State in the Classic Maya Lowlands : An Epigraphic Approach to Territorial Organization, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.

Martin, Simon

2000 Los señores de Calakmul. Arqueología Mexicana 42, pp.40-45.

Martin, Simon and Nikolai Grube

2000 Chronicle of the Maya Kings and Queens : Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya, Thames and Hudson Ltd, London..

Newsome, Elizabeth A.

2001 Trees of Paradise and Pillars of the World : The Serial Stela Cycle of "18-Rabbit-God K," King of Copan, University of Texas Press, Austin.

Pincemin, Sophia, Joyce Marcus, Lynda Florey Folan, William J. Folan, María del Rosario Dominguez Carrasco and Abel Morales Lopez



1998 Extending the Calakmul Dynasty Back in Time : A New Stela from a Maya Capital in Campeche, Mexico. Latin American Antiquity, vol. 9, No. 4, pp.310-327.

Schele, Linda and David Freidel

1990 A Forest of Kings : The Untold History of the Ancient Maya. William Morrow and Co., New York.

Schele, Linda and Peter Mathews

1998 The Code of Kings : The Language of Seven Sacred Maya Temples and Tombs, Scribner, New York.

Sharer, Robert J. with Loa P. Traxler

2006 The Ancient Maya, 6 th ed., Stanford University Press, Stanford.

Willey, Gordon R.

1974 "The Classic Maya Hiatus : A Rehearsal for the Collapse ?" In Mesoamerican Archaeology : New Approaches, ed. Norman Hammond, pp. 417-430. Duckworth, London.

佐藤孝裕

2004 「11EbのEntrada－A.D.378のティカルの政変－」『史学論叢』第34号、26-54頁。

#### Las dinastías de Calakmul, el reino de la Cabeza de Serpiente

El reino de Calakmul, cuyo glifo emblema fue la cabeza de serpiente, fue una de las dos superpotencias durante la época clásica en las tierras bajas mayas. Su historia se remonta a la época preclásica y hacia el final de la época se estableció una dinastía. Sobre todo, después de la derrota de su rival, otra superpotencia Tikal, Calakmul gozó del apogeo de su larga historia. Su poder ejerció una gran influencia ampliamente sobre varios reinos por alianza política, matrimonio y guerra. Pero 130 años después, Tikal se restauró y venció Calakmul. La esfera de influencia de Calakmul se estrechó y se debilitó. Pero el fin de historia de Calakmul fue al mismo tiempo el fin de historia de casi todos reinos de la época clásica.